

関連イベント

①アルバレス・ブラボを知る I

講演会「アルバレス・ブラボ—恩寵と優美さ—」

日時：4月16日(日) 14:00-15:30 (開場 13:30)

講師：港 千尋 (写真家・多摩美術大学教授)

会場：当館多目的室

参加料：無料

定員：70名 (応募多数の場合は抽選)

申込締切：3月31日(金) 必着

②アルバレス・ブラボを知る II

講演会「静かなる光と時  
—アルバレス・ブラボの生涯と作品—」

日時：5月20日(土) 14:00-15:30 (開場 13:30)

講師：塚田美紀 (世田谷美術館 主任学芸員)

会場：当館多目的室

参加料：無料

定員：70名 (応募多数の場合は抽選)

申込締切：5月5日(金・祝) 必着

【①②申込方法】

当館 HP 申込フォーム(www.shizubi.jp) または往復はがきにて。

1件につき4名様まで。

※往復はがき記載事項 ①催事名、催事日 ②氏名(参加人数分) ③年齢

④住所(郵便番号から) ⑤電話番号

返信面に宛先を記入の上、静岡市美術館まで。

※抽選の如何にかかわらず結果は通知致します。

③当館学芸員によるギャラリートーク

日時：4月29日(土・祝)、5月13日(土)

いずれも 14:00-(各回 40分程度)

参加料：無料(要観覧券)

申込不要(当日受付前にお集まりください)

④しずびちびっこプログラム

日時：5月20日(土)

①10:30-12:00、②14:00-15:30

対象：2歳以上の未就学児 各回10名

(保護者は要観覧券)

申込締切：5月5日(金・祝) 必着

※申込方法、詳細は当館 HP をご覧ください。

⑤シズオカ × カンヌウィーク 2017 連動企画

Shizubi シネマアワー vol.20

「ファイnder越しの世界」

「Shizubi シネマアワー」は美術館ならではのセレクトで、さまざまな映画を上映するシリーズです。第20回目は、写真家を追ったドキュメンタリー映画2本を上映します。

①『フリーダ・カーロの遺品 石内都、織るように』  
(小谷忠典監督 2015年 日本 89分)

②『未来をなぞる 写真家・畠山直哉』  
(畠山谷平監督 2015年 日本 82分)

日時：①5月6日(土) ②5月7日(日)

いずれも 14:00-(開場 13:30)

会場：当館多目的室 ※簡易の映像設備での上映になります

参加料：500円(チケット制)

チケット販売：3月18日(土)より静岡市美術館受付

にて販売(定員になり次第販売終了)

定員：各回70名 企画協力：(株)サーナートホール

《死者の日》1932-33年

ゴールデンウィーク特典!

4月29日(土・祝) - 5月7日(日)の9日間、展覧会をご観覧の方先着30名様にメキシコ産マヤビニックコーヒー(ドリップ一杯用)をプレゼントします。

\*有料観覧の方に限ります



あなたのカメラを SNS で紹介しよう!

お気に入りのカメラの画像に「#shizubiカメラ部」をつけて Twitter もしくは Instagram に投稿してください。

投稿画面のご提示で、当館オリジナルグッズをプレゼント!

※アルバレス・ブラボ写真展をご観覧の方に限ります。

※カメラの種類はフィルム・デジタルを問いません。(携帯、スマートフォンは対象外)

※投稿画像(コメントを含む)は、当館 HP、SNS 等でご紹介させて頂く場合がございます。



■同時開催

Shizubi Project 6 彼方へ 國府理・林勇気・宮永亮

3月28日(火) - 6月18日(日)

■次回展覧会

没後150年 坂本龍馬

7月1日(土) - 8月27日(日)

JR 静岡駅より徒歩3分 夜7時まで開館



静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

tel. 054-273-1515 (代表) www.shizubi.jp



《夢遊》1931年 ヴァレール・アルバレス・ブラボの作品 ©Cecile Uhliriel / Archivo Manuel Alvarez Bravo, S.C.

MANUEL ÁLVAREZ BRAVO PHOTOGRAPHS  
Mexico, Light and Time in Silence

アルバレス・ブラボ写真展  
—メキシコ、静かなる光と時—

2017年4月8日|土| - 5月28日|日| 静岡市美術館

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：伊藤・小川 広報担当：青木・大庭

静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F info@shizubi.jp

Aoi Tower 3F, 17-1, Koyamachi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN

tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

# アルバレス・ブラボ写真展—メキシコ、静かなる光と時

## Manuel Álvarez Bravo Photographs—Mexico, Light and Time in Silence

20世紀写真史に大きな足跡を残したマヌエル・アルバレス・ブラボ（1902-2002）。メキシコ革命後の1920年代末に頭角を現し、最晩年の1990年代末に至るまで、一貫して独自の静けさと詩情をたたえた写真を撮り続けました。

本展は、作家遺族が運営するアーカイヴの全面的な協力を得て開催する、国内最大規模の本格的な回顧展です。192点のモノクロプリントと多数の資料により、約70年におよぶアルバレス・ブラボの足跡を辿ります。



《自画像》1980年

### 開催概要

■開催期間：2017年4月8日(土)－5月28日(日) 全45日間

■休館日：毎週月曜日（ただし5月1日(月)は臨時開館）

■開館時間：10:00－19:00（展示室入場は閉館30分前まで）

■観覧料：一般1,000（800）円、大高生・70歳以上700（500）円、中学生以下無料

\*（ ）内は前売りおよび当日に限り20名以上の団体料金  
\*障害者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料

■前売券：2月18日(土)から4月7日(金)まで販売

静岡市美術館、チケットぴあ [Pコード：768-091]、ローソンチケット [Lコード：42590]、セブンチケット、谷島屋呉服町本店、谷島屋マークイズ静岡店、戸田書店静岡本店、戸田書店城北店、江崎書店パルシェ店、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店

■主催等 主催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団、Daiichi-TV、読売新聞社、美術館連絡協議会（予定）  
後援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、在日メキシコ合衆国大使館

特別協力：マヌエル・アルバレス・ブラボ・アーカイヴ

企画協力：クレヴィス

協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、キャノンマーケティングジャパン

### みどころ

① **メキシコの巨匠** アルバレス・ブラボの回顧展。100年を生きた写真家の足跡を辿ります。

② 日本での展覧会は **約20年ぶり！** 没後としては初の回顧展。

【日本での個展】1983年 フォト・ギャラリー・インターナショナル（東京）／1997年 清里フォトアートミュージアム（山梨）

③ **初期から晩年までの192点**のモノクロプリントを展覧する **本格的な回顧展**

④ 遺族が運営するアーカイヴの全面協力を得て開催。 **良質なプリント**で、

**静けさと詩情**をたたえたアルバレス・ブラボの世界を堪能！

⑤ 全国巡回の **最終会場！** お見逃しなく。

# マヌエル・アルバレス・ブラボ（1902－2002）略年譜

## Manuel Álvarez Bravo(1902－2002) Chronology

1902 2月4日メキシコシティ中心部に8人中5番目の子として生まれる。父は教師でアマチュア写真家。

1910（8歳） **メキシコ革命**が勃発、10年あまり動乱が続く。

1915（13歳）寄宿学校を退学し、父亡き後の生活を支えるため働き始める。学友の父からカメラを贈られる。

1916（14歳）メキシコ財務省の会計係となる。翌年サンカルロス美術学校の夜間コースで学ぶ。

1923（21歳）ビクトリアリズムのメキシコ風景写真で知られる、ドイツ出身のフーゴ・ブレイメに暗室作業を学ぶ。米国から写真家の**エドワード・ウェストン**と**テイナ・モドッティ**が来墨。モドッティには1927年に出会う。

1924（22歳）初めてカメラを買う。この頃のビクトリアリズム調の写真は、のちに自ら破棄した。

1925（23歳）のちに写真家として活躍するロラ・マルティネス・デ・アンダと結婚（－1934年頃）。一男を授かる。

1928（26歳）「第1回芸術写真展」（メキシコシティ）に出品。この頃、**モダニズム**のスタイルを探求。プラチナ・プリントを初めて手がける。

1929（27歳）モドッティが匿名でウェストン宛にアルバレス・ブラボの写真を送り、注目される。また彼女から画家**ダイエゴ・リベラ**を紹介される。この年、国立サンカルロス美術学校で写真を教える（翌年辞職するが、30年代に何度か復職）。

1930（28歳）国外追放となったモドッティからカメラを譲り受け、文化紹介誌『メキシカン・フォークウェイズ』の仕事も引き継ぐ。

1931（29歳）**写真家として独立**するため、財務省を辞職。この頃フランスの写真家**ウジェーヌ・アジェ**の写真集を入手する。エイゼンシュテインの映画『メキシコ万歳』の撮影ロケに同行。リベラが審査員を務めたセメント会社ラ・トルテカの芸術コンクールの写真部門で一等賞を受賞。

1932（30歳）画廊ガレリア・ボサダ（メキシコシティ）で**初個展**。18点を展示。

1933（31歳）写真家・映画製作者のポール・ストランドと出会い、小旅行をする。

1935（33歳）前年来墨していた**アンリ・カルティエ＝ブレッソン**と芸術宮殿（メキシコシティ）で二人展を開催。同展にウォーカー・エヴァンスの作品を加えたドキュメンタリー&アンチ・グラフィック展がジュリアン・レヴィ・ギャラリー（ニューヨーク）で開催。

1938（36歳）リベラ宅にて詩人の**アンドレ・ブルトン**、革命家**レフ・トロツキー**に紹介される。初めて実験的にカラー・プリントを制作する。

1939（37歳）ブルトン企画の「メキシコ」展（パリ）に出品。シュルレアリスム芸術誌『ミノトル』にも作品が掲載される。

1940（38歳）「シュルレアリスム国際展」（メキシコシティ）に出品。ニューヨーク近代美術館（MoMA/ニューヨーク）の「メキシコ美術の2000年」展に、唯一の現代写真家として出品。

1942（40歳）米国人ドリス・ハイデンと結婚（－1962年）。一男一女をもうける。

1943（41歳）メキシコ映画産業労働組合のスタイル写真家として働き始める。50年代には**ルイス・ブニュエル**の映画『昇天峠』の製作に関わる。自身も50年代末から70年代にかけて8mmやSuper 8mmで映画製作し、映画産業との関わりが深くなる。

1945（43歳）現代芸術協会の主催により個展「芸術としての写真」（メキシコシティ）を開催、最初の主要回顧展となる。

1949（47歳）国立芸術院の委嘱を受けてチアパス州に赴き、ボナンパク遺跡や先住民集落の記録写真を撮る。

1955（53歳）エドワード・スタイケン企画の記念碑的展覧会「人間家族」（The Family of Man）展（MoMA/ニューヨーク）に出品。

1957（55歳）メキシコ造形美術サロン（メキシコシティ）にて、新作を含めた個展を12年ぶりに開催。

1959（57歳）映画産業の仕事辞め、メキシコ造形美術出版基金を創設。

1962（60歳）メキシコシティ南部コヨアカンに自宅を建てる。フランス人コレット・ウルバフテルと結婚。二女をもうける。

1968（66歳）メキシコオリンピックの文化プログラムの一環で芸術宮殿（メキシコシティ）で回顧展を開催、250点展示。

1972（70歳）芸術宮殿（メキシコシティ）で400点を展覧する大規模な回顧展を開催。出品作は**メキシコ政府が買い上げた**。以降、米国、イスラエル、スペインなど各地で回顧展が開催される。

1976（74歳）この頃、自宅やその庭を舞台にしたヌードのシリーズを新たに撮り始める。

1997（95歳）イメージ・センター（メキシコシティ）で「ヴァリエーション」と題した新作170点による大規模な個展を開催。

2002（100歳）10月19日、コヨアカンの自宅で永眠。

2005 娘のアウレリアが遺作や資料の調査・管理を目的にマヌエル・アルバレス・ブラボ・アーカイヴを設立。

## 第2章 路上の小さなドラマ

1940年代から60年代半ばまでのアルバレス・ブラボは作品発表の機会が少なく、個展はほぼ10年に1回しか開いていません。しかし撮影は続けており、1950年代以降は、街角の写真に新しい展開が見られます。若い頃の詩的な持ち味を残しつつ、人々が道を行き交う様子を少し遠くから眺めた写真には、ユーモアのあるタイトルが付され、日常の光景に潜むメキシコらしさが軽やかに照らし出されました。



左：《信すべき夢》1966年  
右：《世間は何と狭いことか》1942年

## 第4部 静かなる光と時—1970-90年代

### 第1章 あまねく降る光



《リュウゼツランの上の窓》1974-76年

1970年代以降、アルバレス・ブラボは国内外での大きな回顧展をとおり、その名が世界に知られてゆきます。主に注目されたのは1930年代の作品でしたが、作家自身は淡々と新作の撮影を続けていました。さまざまな質の光とその移ろい、それらがもたらす魅力的なかたちに対して、作家はいっそう細やかなまなざしを注いでいきます。

#### 《リュウゼツランの上の窓》1974-76年

リュウゼツラン（竜舌蘭）はメキシコを中心に中南米に自生し、ブルーアガベと呼ばれる種はテキーラの原料として知られています。

### 第2章 写真家の庭

《ショロトル》1960年代



《シリーズ〈内なる庭〉より》1995-97年

アルバレス・ブラボは1960年代前半メキシコシティ南部のコヨアカンに庭のある自宅を建てました。以降、草木が生き生きと生い茂り、よく風の通るその空間が、作家にとっての親密な小宇宙となってゆきます。ごく小さな空間に干される日々の洗濯物、壁やガラス窓と戯れる木々の影など、日常を満ちす静かな光と影は、人生の最終幕において喜びに満ちたかたちで現れています。



## 第1部 革命後のメキシコ—1920-30年代

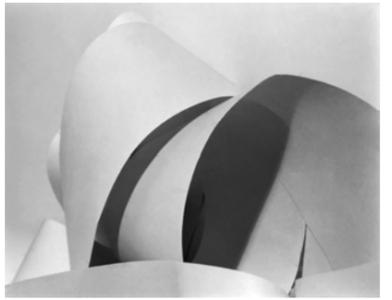
### 第1章 モダニズムへ

1910年、メキシコでは専制的な政治体制の打破と社会変革を求める革命がはじまりました。その動乱がひと段落した1920年代、芸術の分野ではディエゴ・リベラらによる壁画運動や前衛芸術が盛り上がりを見せます。アルバレス・ブラボはこのような時代にアマチュア写真家として活動をスタートさせました。1923年、アメリカ合衆国から写真家のエドワード・ウェストンとティナ・モドッティがメキシコを訪れます。若きアルバレス・ブラボも彼らの力強いモダニズムの表現に影響を受け、身近な対象のフォルムを強調した、堂々たる記念碑のような写真表現で注目されました。

上：《紙の波》1926-27年 下：《ラ・トルテカ》1931年

#### 《ラ・トルテカ》1931年

セメント会社トルテカが開催した芸術コンクールの写真部門で一等賞を受賞した作品。画家のディエゴ・リベラも審査員を務め、シンプルな構成ながらも力強くそそり立つコンクリートが、新生メキシコのすぐれた象徴であると高く評価されました。翌年、アルバレス・ブラボは初個展を開催し、写真家として実質的なデビューを果たします。



### 第2章 ざわめく街の一隅で



1930年代、アルバレス・ブラボはモダン都市に変貌しようとするメキシコシティをよく歩き、町の一隅でふと出合った光景を写し取ってゆきます。パリを撮ったウジェーヌ・アジェに感銘を受け、彼の作品から日々の生活をシンプルに撮ることのなかにひそむ「魔術」を教わったと後に綴っています。街角の大衆食堂を撮った《身をかがめた男たち》では、温かな光が当たる男たちの背中への連なりが心地よいリズムを刻んでいます。しかし彼らの首は影のなかに隠れ、こちらを向くこともなく背を向けた姿はどこか不穏な雰囲気も漂い、この時期のアルバレス・ブラボの資質をよく示しています。

#### 《眼の寓話》1931年

眼鏡屋の看板を撮った本作は、アルバレス・ブラボの作品のなかでも最も謎めいた作品のひとつとして知られています。ヴィジュアル週刊誌『イマヘン』(Imagen)に掲載された時は文字が正しく読める「表焼き」での掲載でしたが、1935年、メキシコを訪れたアンリ・カルティエ＝ブレッソンと開いた二人展では、現在のように反転した「裏焼き」のヴァージョンが出品されました。アルバレス・ブラボは最初、向かいの床屋の鏡越しにこの眼鏡屋を見ていたというエピソードが残っていますが、何が表(現実)で何が裏(虚像)なのかといった、「視ること」への問いかけがそこには隠されているようです。さらに眼鏡屋という題材や、いくつもの眼、「SPIRITO(Spirit/精神)」という店主の名前など、幾重にも重なる視覚の戯れが、より一層この作品の謎を強調させています。

上：《身をかがめた男たち》1934年 下：《眼の寓話》1931年



## 第2部 写真家の眼—1930-40年代

### 第1章 見えるもの／見えないもの

1930年代以降のアルバレス・ブラボは、見えるものを写しながら、見えないものをも指し示すという試みを、折に触れて行うようになります。一般に、写真を撮る側は、撮られる側の姿を一方的に見つめるもので、実は撮られる側が何をみているのかは計り知れません。見ているはずのこちらには見えず、あちらだけに見えている世界がある—撮影者の目の前で彼方を見つめる《鳥を見る少女》や、古びた建物の暗く小さな円窓を覗き込む《舞踏家たちの娘》など、数々の名作が生まれました。



左：《舞踏家たちの娘》1933年 右：《永遠なるものの肖像》1935年



### 《夢想》1931年

頬に手を添え、物憂げな表情を浮かべる少女は何を考え、何処を見ているのでしょうか。大人へと成長していく少女の心に広がる世界は、境界線のような柵のこちら側にいる私たちには見えないことはないのかもしれませんが。彼女の右肩に落ちる一点の光もまた、何かを暗示しているかのようです。何気ない瞬間を捉えたように見える本作ですが、柵が織りなす線のリズムや、少女の右足がその隙間に丁度入り込む構図などから、写真家の確かな技術を感じます。

上：《鳥を見る少女》1931年 下：《夢想》1931年

### 第2章 生と死のあいだ

メキシコには、生と死は対立するものでなく、円環をなしているという先スペイン期の文化から継承した考え方があります。アルバレス・ブラボもこうした二元的な死生観がにじみ出るような作品を残しています。



《ストライキ中の労働者、殺される》は、一見、劇的な場面を映した報道写真のようですが、アルバレス・ブラボはこの作品と《民衆の渇き》を合わせて見せることを好んだようです。血を流して横たわる若者と、水を飲む少年が対になることで、永遠に循環を続ける世界が静かに開示されています。



左：《ストライキ中の労働者、殺される》1934年  
右：《民衆の渇き》1933-34年

## 第3章 時代の肖像

左：《フリーダ・カーロ》1937年頃  
右：《ディエゴ・リベラ、レフ・トロツキー、アンドレ・ブルトンら》1938年



1930年代から40年代のメキシコは、ファシズム体制を逃れた亡命芸術家や知識人を数多く受け入れ、当時最も国際的な文化交流の場になっていました。ソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテイン、政治家レフ・トロツキー、フランスの作家アンドレ・ブルトンなど、多くの外国人がメキシコを訪れ、アルバレス・ブラボは彼らの肖像を活写しています。また、20世紀初頭のメキシコ革命を背景に興隆した壁画運動の三巨匠、ホセ・クレメンテ・オロスコ、ディエゴ・リベラ、ダビド・アルファロ・シケイロスの姿も収めています。メキシコ・ルネサンスとも言われるこの運動は、マヤ、アステカといったスペイン征服以前のインディオ文明の復興と、新しいメキシコの建国精神をわかりやすく民衆に伝えることを目指しました。さらにアルバレス・ブラボはリベラの妻で、メキシコを代表する女性画家のフリーダ・カーロの姿も撮影しています。アルバレス・ブラボは、政治的な活動に具体的に関わったことはなかったようですが、同時代に身近に起こった出来事に対して、鋭く反応する感覚を持ち合わせていました。

### 《ディエゴ・リベラ、レフ・トロツキー、アンドレ・ブルトンら》1938年

中心に位置するのが革命家トロツキー。トロツキーは、レーニン死後スターリンと対立し、1929年に国外追放、1937年にメキシコへと亡命します。右側にいるのがシュルレアリスムの指導者ブルトンで、彼らは共同で「独立革命芸術のために」という宣言を執筆します。そして左側にいるのが、彼らのメキシコ滞在を世話したディエゴ・リベラ。アルバレス・ブラボはリベラを介して、この歴史的にも重要な場面に立ち会うことになりました。

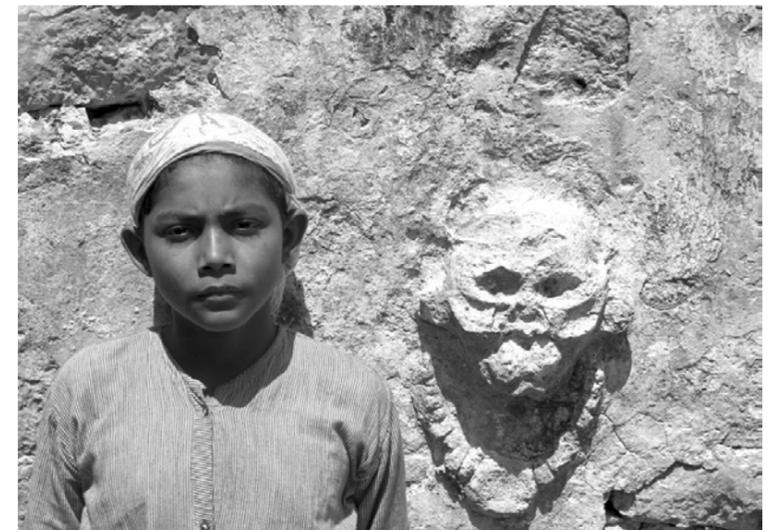


## 第3部 原野へ／路上へ—1940-60年代

### 第1章 原野の歴史

1945年、アルバレス・ブラボはそれまでの仕事の集大成として大個展「芸術としての写真」を実現させます。しかし、その頃すでに安定的な生活の糧を求めて、黄金時代を迎えた映画産業界でスチル写真家として働いていました。

また、政府によるインディヘニスモ（先住民保護・開発政策）推進を背景に、古代遺跡や先住民集落などの調査隊に同行して、記録写真を撮る仕事も行いました。《トゥルムのマヤ人の少年》もそうした調査の折りに撮影されました。先住民たちの尊厳に満ちた姿に加え、本作では遺跡と少年の相似性がユーモアを誘っています。



《トゥルムのマヤ人の少年》1945年